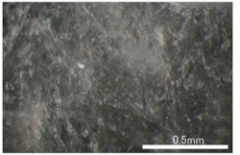
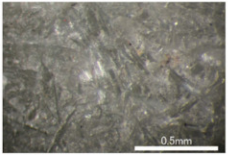
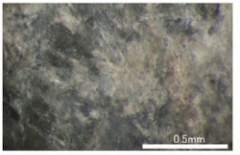


1　№1　透閃石岩　TR-A1　×100

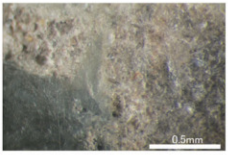


2　同　×100

№1

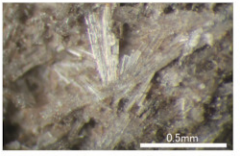


3　№2　透閃石岩　TR-B　×100

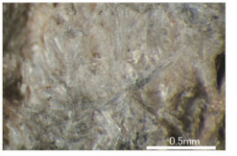


4　同　×80

№2

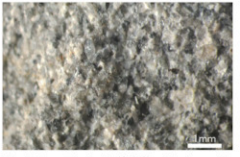


5　№3　透閃石岩　TR-C　×100

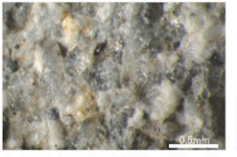


6　同　×80

№3



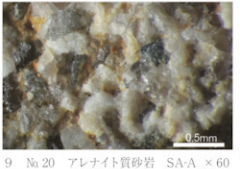
7　№5　アレナイト質砂岩　SA-A　×20



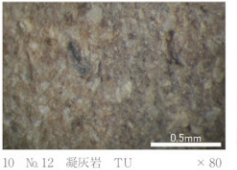
8　№6　アレナイト質砂岩　SA-A　×60

№5

№6



9　№20　アレナイト質砂岩　SA-A　×60

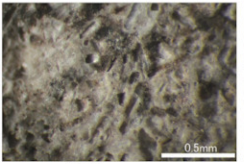


10　№12　凝灰岩　TU　×80

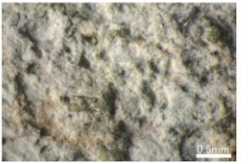
№20

№12

写真８　主な石器石材（１）

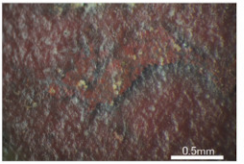


11　№14　凝灰岩？　TU？　× 80

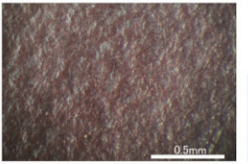


12　№4　安山岩（斑晶質）　AN-C　× 40

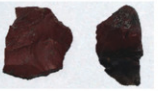
№14　№4



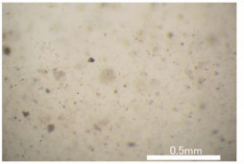
13　№16　碧玉（鉄石英）　JA-1　× 60



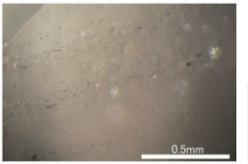
14　№17　碧玉（鉄石英）　JA-1　× 80



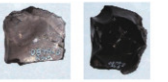
№16　№17



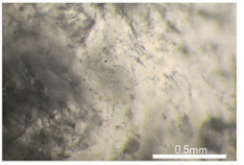
15　№21　黒曜石　OB　× 80



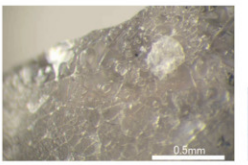
16　№22　黒曜石　OB　× 100



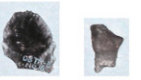
№21　№22



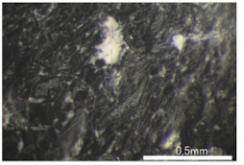
17　№24　黒曜石　OB　× 80



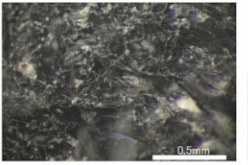
18　№23　黒曜石・受熱石器　OB　× 80



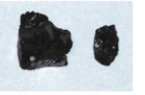
№24　№23



19　№25　松脂岩（魚津産「黒曜石」）× 100

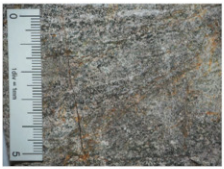


20　№26　松脂岩（魚津産「黒曜石」）× 80



№25　№26

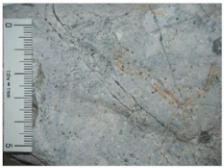
写真9　主な石器石材（2）

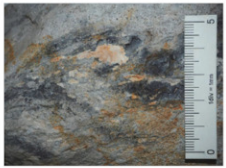

1　No.31　飛騨片麻岩

2　No.32　基盤岩類　砂岩 - 凝灰岩互層

飛騨片麻岩

砂岩 - 凝灰岩互層

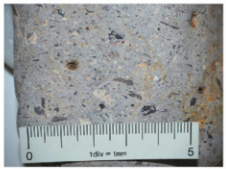

3　No.33　濃飛流紋岩


4　No.34　不明　溶結凝灰岩

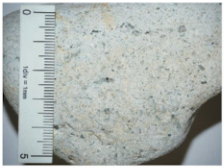
濃飛流紋岩

溶結凝灰岩

5　No.35　太美山層群　溶結凝灰岩

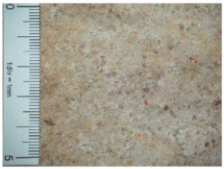

6　No.36　太美山層群　溶結凝灰岩

溶結凝灰岩


7　No.37　太美山層群　酸性凝灰岩

8　No.38　太美山層群　酸性凝灰岩

酸性凝灰岩


9　No.39　珪長岩

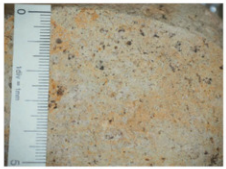
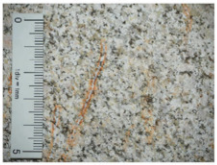
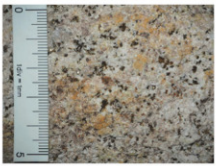

10　No.40　珪長岩

写真10　主な自然礫の礫種（1）

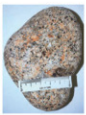
11　№41　閃緑斑岩

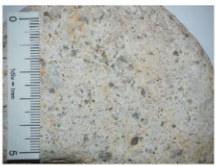

12　№42　花こう閃緑岩

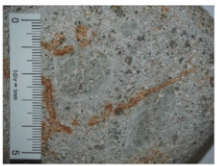
閃緑斑岩

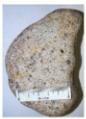

13　№43　花こう閃緑岩

14　№44　花こう斑岩


花こう斑岩


15　№45　花こう斑岩


16　№46　岩稲累層　緑色凝灰岩


花こう斑岩

17　№47　岩稲累層　緑色凝灰岩

18　№48　岩稲累層？　砂岩

緑色凝灰岩

砂岩

19　№49　岩稲累層？　砂岩

20　№50　医王山累層　酸性凝灰岩

砂岩

写真11　主な自然礫の礫種（2）

第Ⅶ章　総　括

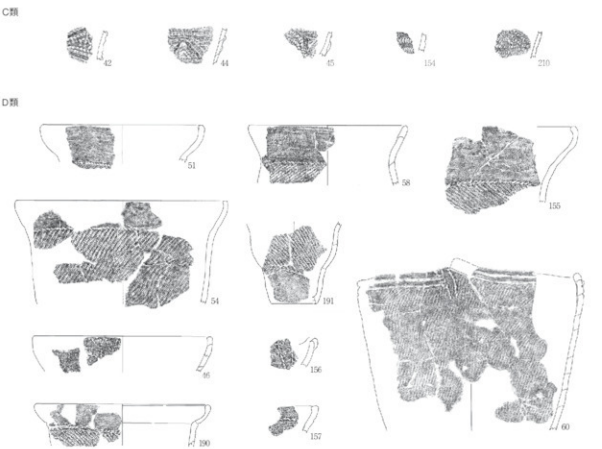
1　縄文時代

（1）縄文土器

縄文土器は，本文中にも記したが中期前葉～中葉（新崎式～上山田式）の1時期に限定される。これらの細分については研究者によって判断基準が異なり，新崎Ⅱ式や新崎式新段階など新崎式に含む考えと上山田Ⅰ式や上山田古式または天神山式と言った上山田・天神山式に含む考えとがある。これらについて研究の浅い筆者にとってはどちらを選択するかは難しい。本文中の土器分類ではA類やB類としたものがそれに相当するが，いずれにせよ在地の土器であることは間違いがない。これとは別に系統の異なる土器がある。C類とD類である。C類としたものは，信州の新道式の影響を受けた土器である。もう一つは東北地方の大木7b式の影響を受けたとみられる頸部に縄文原体を押圧するD類である。これらいわゆる外来系土器について県内外の類例をあげて考えてみたい。

A　C類土器について

C類は，隆帯で三角形や楕円形の区画を創出し，その周囲に爪形刺突を施す一群である。富山県や石川県では信州系や新道式系統として扱われている。中期前葉～中葉の新崎式～上山田・天神山式に

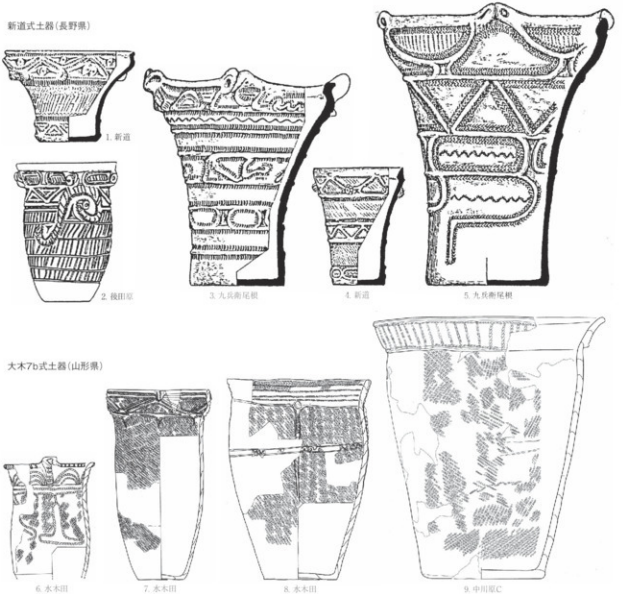


第65図　徳万頼成遺跡の主なC・D類土器（1：6）

伴って出土する。北陸地方の分布は，新潟県の上越地域から石川県の北加賀地域までを中心とする。

徳万頼成遺跡では小破片のみの出土（第65図）だが，楕円形モチーフ（45）と三角形モチーフ（42・44・210）の一端が見える。刺突文は角押状工具で縦長(44)と三角形(42・45・210)，C字状爪形文(154)などがある。胎土は在地と変わらない白色の粘土を基本とする。

富山・石川県に見られる新道式系統（第67図）も同様で，2～6・14・15のような三角形モチーフや10・13・17のような楕円形モチーフがある。刺突文についても縦長（1など），三角形（3など），C字状爪形文（17など）と同じである。これらに供伴する在地土器は新崎式新段階から上山田式古段階にかけてである。本場の新道式（第66図1～5）とは三角形と楕円形モチーフを組み合わせた第67図1・3は類似している。けれども，そのほかの第67図5・10・14などは口縁部に三角形や楕円形のモチーフを持つが，その下の胴部は斜行縄文であり本場の新道式とは異なる。このように，富山や石川の新道式系統の土器は文様帯を口縁部に限定するものが多い。徳万頼成遺跡では口縁部破片のみで全体をうかがい知ることはできない。けれども，胴部にその文様を持つ破片が見つかっていない



第66図　新道式土器と大木７ｂ式土器（1：6）

ことから斜行縄文であった可能性が高い。

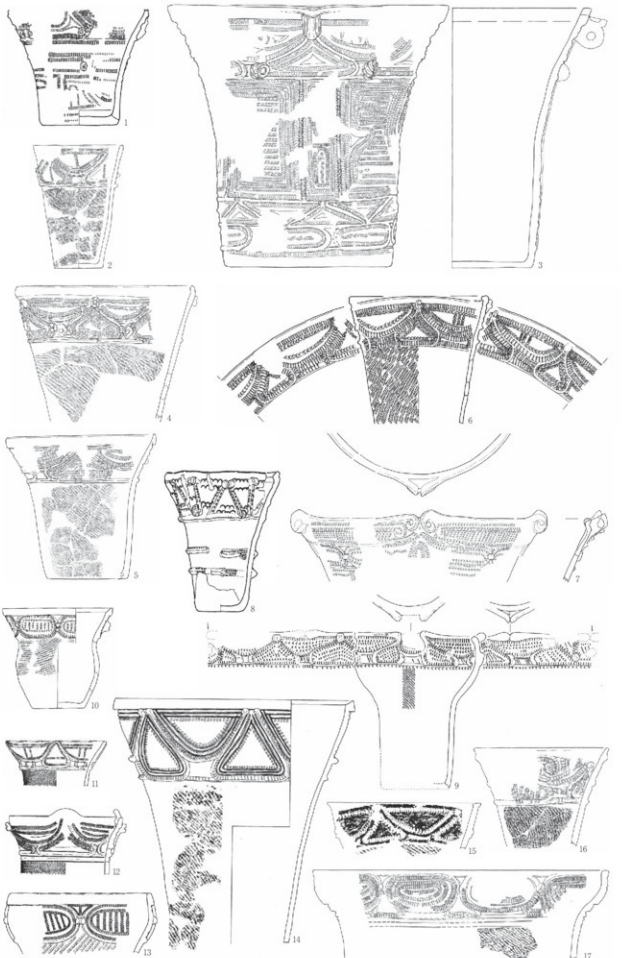
B　D類土器について

無文の口縁部下の頸部に縄文原体を押圧する深鉢や鉢。徳万頼成遺跡では内湾する口縁部をもつものが多く，頸部横方向に押圧するもの(51・54・58・190)と縦方向に押圧する(46・60・156)とがある。191は上下逆転した形で底部を無文とし，胴部との境に横方向の縄文原体を押圧する珍しいタイプ。60は口縁突起部から垂下させる形で縦方向に縄文原体を押圧する。このようなD類の土器は第68・69図にあるように富山・石川両県でも多く出土している。ただし，これらは有文土器としてではなく粗製土器の一つとして扱われ，いずれの報告でも系統的なあり方まで想定されていない。C類同様に新崎式新段階から上山田式古段階の土器に供伴する。

新潟県では上越地方を中心に出土し，糸魚川市長者ヶ原遺跡（第70図1～10）では第六群（第二類）土器と分類され，「円筒式から大木7・8式頃にもあり，十三菩提，下小野，五領ヶ台の各式にも認められるが，北関東では加曾利E式にも散見する。口縁部を無文としたり，磨きあげる手法から考えると，本遺跡では第三群土器（上山田式併行）以降に伴出する可能性がつよい。」（藤田・清水1964）としている。糸魚川市六反田南遺跡でも第70図11～23にあるように多くの土器が出土している。報告書（山本2012）では，「異系統土器」で上山田・天神山式土器に次ぐ出土量をもつ土器として「頸部に鬱面圧痕を持つ土器」（D3類）と分類している。しかし，系統については不明としている。六反田南遺跡の土器には横方向だけでなく，縦方向（第70図15・17）や弧状（第70図18・22）など縄文原体押圧方向で多くのバリエーションがみられる。これらは大木7b式（第66図6～9）にみられるそれとも類似しており，その影響下で派生した可能性がある。ただし，新潟県でも上越地方より北ではその数は少なく（第70図24など），大木7b式との接点を直接探すのは難しい。新潟県でも北陸地方の新崎式や上山田式が多く出土する糸魚川付近が中心地域で，西方の富山・石川，一部飛騨地方（第70図27・28）にも広がったと考える。

C　C・D類の供伴性

徳万頼成遺跡では在地のA類（新崎式系統）やB類（上山田式系統）にC類とD類が供伴する。C類とD類とでは後者が多い。富山市鏡坂Ⅰ遺跡や金沢市笠舞（かさまい）A遺跡など富山・石川県でもこの傾向はほぼ同じである。C類については全体的に少なく，B類としたものにも組み込まれていわば折衷土器となるものも多々ある。胴部斜行縄文の個体が多いのも在地化している指標と言えよう。一方で，D類はC類の出ていない中期前葉から中葉の遺跡でも出土し，より在地性の高い状況にある。このため粗製土器の一つとして扱われることが多い。



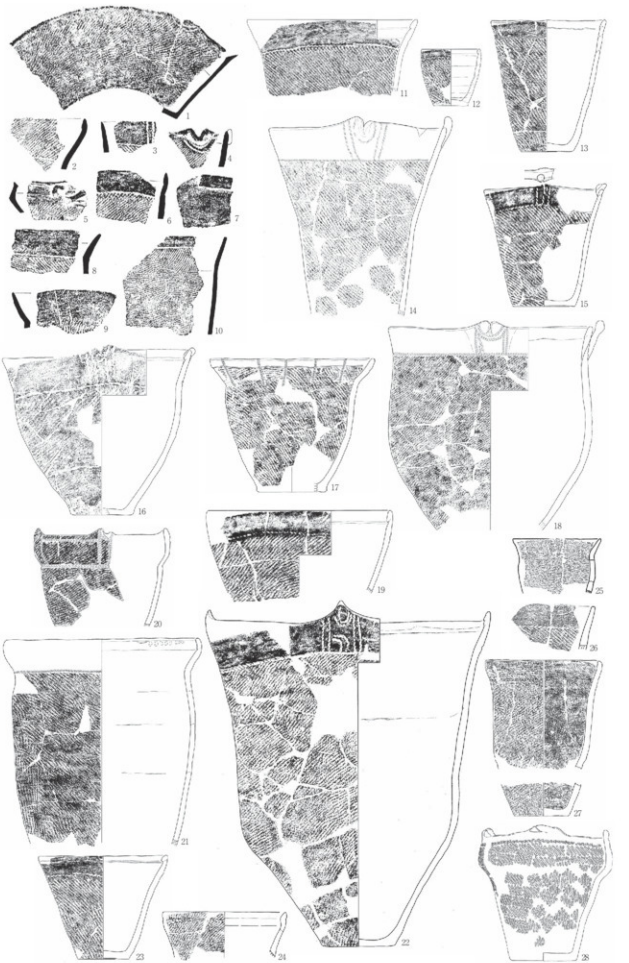
第67図　富山・石川県内の新道式系統の縄文土器（C類）（1：6）

1. 富山県上市町永代．2～5. 富山市鏡坂Ⅰ．6. 砺波市嶽照寺．7. 小矢部市桜町．8・9. 砺波市松原．10. 石川県金沢市加賀朝日．11～13. かほく市上山田．14～17. 金沢市笠舞A

第68図　富山県内の頸部に縄を押圧する縄文土器（D類）（1：6）
1～6．朝日町境A，7．朝日町馬場山G，8～10．黒部市浦山寺蔵，11～14．魚津市早月上野，15．上市町永代，16．立山町野沢狐幅

第69図　富山・石川県内の頸部に縄を押圧する縄文土器（D類）（1：6）

17．富山県富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ．18～24．富山市鏡坂Ⅰ．25～28．砺波市松原．
29・30．石川県金沢市笠舞A．31．かほく市上山田．32・33．金沢市加賀朝日．34．能美市宮竹庄が屋敷C．
35・36．七尾市奥原縄文



第70図　富山県周辺の頸部に縄を押圧する縄文土器（D類）（1：6）
1～10．新潟県糸魚川市長者ヶ原，11～23．糸魚川市六反田南，24．魚沼市清水上，25・26．上越市山屋敷Ⅰ
27．岐阜県高山市野内，28．飛騨市堂ノ前

（2）土　偶

A　観察所見（第71図）

法量　高さ9.0cm，幅5.0cm，重さ187.1ｇ。

色調　正・上面は2.5Y8/3淡黄色。背面は2.5Y5/2暗灰黄色。下面は黒斑で7.5Y3/1オリーブ黒色。

胎土　白色や橙色の粒が多く入る。このほかに数は少ないが石英も入っている。

頭部　正面を逆三角形で顔面，上面を不整円形で頭頂部とする。顔面には幅約４㎜の粘土紐をｖ字状に貼り付け眉とし，それに沿うようにヘラ状工具？による刺突で目と鼻孔を表現している。顔面下方には同様な工具による刻みで口を表す。眉と口の上の一部は剥落している。

頭頂部は正面から背面に下がっていく形状。幅約２㎜の棒状工具？による沈線文で文様枠を形成した後，内部をユビオサエで正面から見てm字状の隆帯を創出している。正面側の隆帯間隙にはヘラ状工具？による刺突を３点１組で２組施す。これらは頭髪を表現しているのだろう。

側面には，棒状工具？による沈線を１条施し顔面との接点に直径約２㎜の刺突を左右１つずつ入れる。耳孔を表現しているのであろう。

背面には，上から下に棒状工具？による沈線を４条垂下させる。後髪を表現しているのだろう。

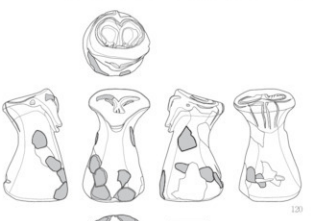
胴部　中実円錐形で頭部に接続する。基本的に無文だが，背面に棒状工具？による横方向の沈線（幅３㎜）が１条みられる。剥落部が多いが，ガジリ以外は手・脚が付着していたものとみられる。剥落部から見ると，側面から正面へ手を回すようにみられる。手で腹を抱えるような仕草を表現しているのであろうか。左手側には背面にかけても剥落部があり後ろに手を回していたことも考えられる。

下面にはガジリの他に直径2.1cmのほぼ円形の剥落部が二つ並んでおり，脚が２本貼り付いていたものとみられる。手脚をつけて復元すると第72図１のようになろうか。

B　土偶の分類（第72・73図）

土偶については研究者によって様々な分類がある（原田 2007，三上 2014ほか）。ここでは中期土偶に一般的な，“河童形土偶”，“立像形土偶”，“ポーズ土偶”の三つの分類を用いて見てみる。

河童形土偶　小林康男氏によれば，「河童形土偶は，頭頂部が平滑ないしは皿状に凹む特徴的な形態が，あたかも河童の頭部を連想させることから名付けられた土偶である。」「中期前葉から後葉に至るまで存続し，分布も関東・中部・北陸・東海にまで及ぶもの」（小林 1997）で，徳万頼成遺跡のそれはまさにこれに符合する。小林氏の分類を援用すれば，形態的特徴で頭部は「平滑で傾斜をもつもの（Ⅰ－Ｂ）」，顔面は「逆三角形ないしはハート形で瓜顔と称されているもの（ａ）」，脚部は「２本の脚を短く・太く造形したもの」となる。顔面の特徴は全体の約６割と一般的だが胴部や手部の特徴には合わない。地域的特徴では北陸では「砺波・富山平野の山間部に集中」とあるがこれに近い。頭部への施文は長山遺跡（５）や追分茶屋（７）などの隆帯による表現に近いと言える。



第71図　徳万頼成遺跡出土土偶（1：3）

立像形土偶　谷口康浩氏は「前期の土偶や円筒土器文化の十字形土偶が，脚のない板状の形態を基本とし，しばしば懸垂用と思われる

小孔を伴うのに対して，しっかりとした脚部を持つ立像形土偶の出現は，土偶変遷史の明確な画期を表し，中部・関東地方の土偶の顕著な特徴をなしている。」「河童形土偶などは立像形土偶の通称として定着している」とする（谷口 1998）。谷口氏は立像形土偶を「長山型」（２～５），「棚畑型」（31），「大沢型」，「坂井型」，「坂上型」，「多摩９型」，「中下原型」，「大村塚田型」，「大明神原型」，「増野新切型」の 10 型式に分類した。この分類では頭部については「長山型」に近いが他の要素は異なる。他の分類でも手の付き方が異なり符合しない。

神保孝造氏はこれとほぼ同様な土偶を「有脚立像土偶」と呼び，１類：板状の胸に続く腹部や尻を張り出した体部に，円柱状の短い脚，やや下向きの短い腕，大きく立体的な頭部をつけるもの（２～５），２類：球状に作られた胴部に手を当てたポーズをとる土偶（15・16）の二つに分けた（神保 1992）。さらに１類についてはＡ型：腕の断面が長方形横長，鼻をつまみあげる（３・４），Ｂ型：腕の断面が長方形縦長，鼻を貼り付ける（２・５）の二つに分類した。新旧関係ではＡ型に比べＢ型が新しい様相を示すとする。この分類では，２類に近い。

ポーズ土偶　小野正文氏によれば，「何らかの所作を示している土偶を総括してポーズ土偶と呼ぶこととする」とし，円錐形中空土偶を「楯原形態」，壺を抱える土偶を「尖石形態」，出産土偶を「広畑形態」と分類した（小野 1998）。このなかで直感的には「楯原形態」が近いと見えた。たとえば，東京都楯原遺跡（25）や山梨県国分寺遺跡（24）のそれは形状や法量がよく似ている。土偶が一つとして同じものがないといった遺物であるという点からは類似性が高いと言えよう。

ただこれらは中空であり，いわゆる「鳴る土偶」である。ということは中実でしかも剥落しているものの脚が付いていた徳万頼成遺跡の土偶とは根本的に異なる。ほかの二つはどうだろう。剥落している右手はおそらく腹を抱えていただろうが，左手は側面から一度浮いて下方についている。このことから「尖石形態」（27）や「広畑形態」（28）である可能性もある。ただし左手が背面に回るようならやはり山梨県鋳物師屋遺跡（30）や石川県上山田貝塚（23）の例にあるような「楯原形態」が近い。

以上のように見てみると徳万頼成遺跡の土偶は，頭部の形状から“河童形土偶”，手脚のあり方から“ポーズ土偶”となる。全体形状からは“立像形土偶”，“円錐形土偶”（小野 1985）にも見える。ところが，個々に見てみるといずれの分類にも該当しない。たとえば，“河童形土偶”や“立像形土偶”は手を横に水平にしている（31）ところが異なるし，“ポーズ土偶”のうち「楯原形態」（24・25）は中空であるし，中実でも脚はつかない（29）。つまり，これらの土偶を直接取り入れたのではなく，部位をいくつかあわせることによって完成されているようである。

C　土偶のあり方

長年，北陸地方の土偶研究をしてきた神保孝造氏によれば中期土偶は 76 遺跡 267 点で前葉（新保・新崎土器様式）が 109 点，中葉（上山田・天神山様式）が 95 点，後葉（串田新・大杉谷様式）が 63 点で前葉が最も多い（神保 1998）[註1]。さらに，前葉は板状・有脚立像（河童形）・円錐形中空の３タイプがあるが中葉には有脚立像（河童形）のみになる（神保 1998）。たしかに中期中葉の徳万頼成遺跡出土土偶は有脚立像土偶（河童形）である。ただ，神保氏が示した中葉の土偶には板状に近い形状ばかりでより立体的な円錐形に近いものがない。北陸地方の土偶で類似性を示すと，頭部は富山市長山遺跡（５）や追分茶屋遺跡（７・８），胴部は富山市前山Ⅰ遺跡（22）や上山田貝塚（23），脚部は長山遺跡（２・３）のようになろう。これらは前葉である。徳万頼成遺跡出土土器は新崎式新段階から上山田式古段階の様相を示し，端境期となる。このことを土偶も表していると言えよう。

第72図　北陸地方の中期前葉～中葉の土偶（1：3）

第73図　徳万頼成遺跡出土土偶と関係性がうかがえる中期前葉～中葉の土偶（1：3）

（3）黒曜石

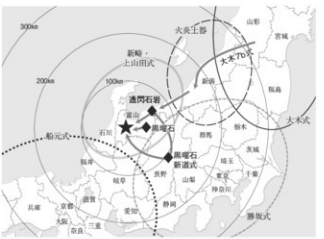
製品はなく，剥片のみだが信州産と魚津産がある。これらの相違は一目瞭然である。つまり，信州産は透明なガラス質であり，魚津産は黒曜石と呼ぶには難しいほど粗雑である。富山県内の中期遺跡出土の黒曜石は，産地推定の結果，開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡や早月上野遺跡などで信州産が他を凌駕する傾向にあり，徳万頼成遺跡も同様な傾向にあると言える。

魚津産黒曜石については麻柄一志氏によって存在が知られるようになり（麻柄 1981），山本正敏氏によってその流通範囲が明らかになってきている（山本 2013）。山本氏によれば中期を中心に新潟県西部から富山県中央部に分布すると言い，産地に近い魚津市石垣遺跡では多く出土している。一方で富山県西部は類例がない。徳万頼成遺跡が初出となり，魚津産黒曜石の分布を考える上で貴重な資料となろう。

（4）遺物からみた交流

以上のように土器，土偶，石材からみた徳万頼成遺跡は，在地産を基本とするローカルな集落であるが，モノによっては遠隔地からの流通がうかがえる。土器では，信州方の新道式系（C 類）や東北方面の大木 7b 式の影響下から糸魚川付近で多くつくられた D 類がある。ただ，これらは胎土から見るに在地であり交易や流通にのってきたものではない。土偶も同様に中部高地系の形態をもつが胎土は在地である。このことから土器・土製品については外来産ではなく模倣品と言える。石器は数少ないが，磨製石斧は透閃石岩で糸魚川付近，黒曜石は魚津産もあるが多くは信州産である。これらは石材鑑定を行っており彼の地からの流通品である。

土器・土製品にしても石材にしても二つのルートが浮かび上がる。一つは信州を中心とする中部高地，もう一つは糸魚川付近からである。ただ，中部高地からは姫川沿いに下っていけば糸魚川に出るわけで，もしかしたら同一ルートの可能性がある。東方のルート途上には魚津産黒曜石もあるわけで徳万頼成遺跡の縄文時代集落は県東部方向からの影響を強く受けて成立したのではないだろうか。前期の富山市小竹貝塚や富山市平岡遺跡など広範囲な流通を表す集落とは異なり，中期前葉から中葉の集落は魚津市早月上野遺跡や富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡でも東方からの遺物が多く占めており，時期的な特性と考える。（町田賢一）



第74図　外来系遺物の流通推定図

註

註 1　富山県内の土偶については神保孝造氏の後，大野淳也氏が毎年集成を行い，土偶研究会資料（大野 2011 ほか）において発表を行っている。

引用・参考文献

我孫子昭二・山崎和巳　1992「東京都の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告　第37集』国立歴史民俗博物館

我孫子昭二　1998「関東西南部の中期土偶」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社

阿部明彦　1984「総括　遺物について」『永木田遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会

有山径世　2000「鏡坂Ⅰ遺跡　遺物」『外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会

飯田　勉　1981「富山八尾中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』八尾町教育委員会

糸魚川市　1986「長者ヶ原遺跡」『糸魚川市史　資料集１－考古編』

今福利恵　1998「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社

大野淳也　2011「富山県の土偶（1992年～2009年度資料を中心に）」『第８回土偶研究会岩手大会資料』土偶研究会

大野淳也　2014「富山県の土偶（2012年度）」『第11回土偶研究会岩手大会資料』土偶研究会

小野正文　1985「所謂円錐形土偶に就て」『研究紀要　2』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

小野正文　1992「山梨県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告　第37集』国立歴史民俗博物館

小野正文　1998「ポーズ土偶とその周辺」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社

岡田裁樹　2003「土製品」『富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

景山和也　2001「遺物　土器」『金沢市笠舞Ａ遺跡（Ⅴ）』金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）

金三津道子　2012「遺物」『早月上野遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

狩野　睦　1987「馬場山Ｇ遺跡　遺物」『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編３－』富山県教育委員会

狩野　睦　1992「土器各説　中期」『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編６－』富山県教育委員会

久々忠義・塚田一成　2006「舟岡地区第１調査区」『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文土器・石器編Ⅰ』小矢部市教育委員会

櫛原功一　1998「山梨県の縄文時代中期土偶」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社

高慶　孝　1992「湯神子Ａ遺跡発掘調査概報」上市町教育委員会

小島俊彰　1979「縄文土器・土製品」『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会

小島俊彰・神保孝造　1992「北陸の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告　第37集』国立歴史民俗博物館

小林康男　1997「河童形土偶の系譜とその変遷」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（1）』勉誠社

小林康男　1998「長野県の中期土偶」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社

近藤頴子　2005「土製品」『池多南遺跡・池多南Ⅱ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

酒井重洋　2003「永代遺跡」『鈴使塚古墳・永代遺跡・安居窯跡群・中山中遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

佐竹桂一　2002「中川原Ｃ遺跡」『中川原Ｃ遺跡　立泉川遺跡』財団法人山形県埋蔵文化財センター

清水　博　1993「鋳物師屋遺跡出土の円錐形土偶に就いて」『山梨縣考古學協會誌　第６号』山梨県考古学協会

神保孝造　1975「土製品」『松原遺跡緊急発掘調査概報』庄川町教育委員会

神保孝造　1977「遺物」『厩照寺遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

神保孝造　1985「土製品」『縄文時代中期前葉の土偶について』『長山遺跡発掘調査報告』八尾町教育委員会

神保孝造　1998「北陸西部の中期土偶」『北陸の様相』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社

神保孝造　2009「とやま発掘物語14　長山遺跡」『埋文とやま　vol.106』富山県埋蔵文化財センター

瀬口眞司　2013「土偶とは何か？」『奈良大ブックレット02　縄文人の祈りと願い』ナカニシヤ出版

高堀勝喜　1987「金沢市加賀朝日遺跡出土の縄文中期土器」『石川考古学研究会々誌　第30号』石川考古学研究会

谷口康浩　1998「土偶型式の系統と土器様式」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社

千葉孝之・福山俊彰・岡宮正光・松川由次　2004「竪穴住居跡」『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

寺内隆夫　2014「平成26年度冬季展　縄文土器展　デコボコかざりのはじまり」長野県立歴史館

寺崎裕助　1996「縄文時代の遺構・遺物　土器」『清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

寺崎裕助　2003「山屋敷Ⅰ遺跡」『上越市史　資料編２　考古』上越市史編さん委員会

富山県埋蔵文化財センター　1993『平成５年度特別企画展図録　縄文土器の世界』

富山県埋蔵文化財センター　2011『浦山寺蔵遺跡　出土品集１【土器編】』

富山県埋蔵文化財センター　2013『松原遺跡　出土品集』

布尾和史　1999「宮竹庄が屋敷Ｃ遺跡について」『能美丘陵東遺跡群Ⅳ』財団法人石川県埋蔵文化財センター

長谷川幸志・小野木学　2009『縄文時代の遺構と遺物』『野内遺跡B地区』財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
林　直樹・早川正一　1996『縄文中期の遺構と遺物』『堂ノ前遺跡発掘調査報告書』岐阜県・宮川村教育委員会
原田昌幸　1997「発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（1）』勉誠社
原田昌幸　1998「発生・出現期の土偶から中期の土偶へ」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社
原田昌幸　2007「土偶の多様性」『縄文時代の考古学11　心と信仰』同成社
原田昌幸　2010『日本の美術№526　土偶とその周辺Ⅰ』ぎょうせい
平田天秋　1982「奥原縄文遺跡　出土遺物」『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
藤田亮策・清水潤三　1964『長者ヶ原』糸魚川市教育委員会
麻柄一志　1981「"魚津産黒曜石"と縄文遺跡」『富山市考古資料館報　№5』富山市考古資料館
増山　仁　1989「遺物　土器」『金沢市笠舞A遺跡（Ⅳ）』金沢市教育委員会
町田賢一　2015「徳万頼成遺跡」『平成26年度　埋蔵文化財年報』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
松本幸治　1977「土偶」『厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
三上徹也　1988『縄文中期の土器　中期中葉　土器』『長野県史　考古資料編　全1巻（4）遺構・遺物』長野県
三上徹也　2014『縄文土偶ガイドブック』新泉社
南　久和　1981「遺物　土器」『金沢市笠舞遺跡』金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会
宮下健司　1992「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告　第37集』国立歴史民俗博物館
宮下健司　1998「中部高地の縄文中期文化と土偶」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社
森　秀典　1985「遺物」『野沢狐幅遺跡発掘調査概報』立山町教育委員会
柳井　睦　1975「遺物」『松原遺跡緊急発掘調査概報』庄川町教育委員会
山崎和巳　1998『関東西南部の中期初頭・前葉の土偶』『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集（2）』勉誠社
山崎美和　2004『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　出土遺物　縄文土器』『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査書』富山市教育委員会
山本友紀　2012『縄文時代中期前葉～中葉の調査（下層の調査）』『六反田南遺跡Ⅳ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山本正敏　2013「魚津産黒曜石の流通」『大境　第32号』富山考古学会
山本正敏　2014「魚津産黒曜石の利用」『埋文とやま　vol.129』富山県埋蔵文化財センター
藁科哲男・東村武信　1985『富山県下遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析』『大境　第9号』富山考古学会

2　古　代

（1）焼壁土坑について

古代下層では壁面に被熱痕が認められたり，底面やそれに近い埋土に炭が残る土坑が6基検出された。これまで富山県内では同様な遺構の調査例が多数報告されており，これにならって本書では焼壁土坑と称する。県内で報告されている焼壁土坑，焼壁穴と称される遺構や被熱痕の残る穴を集計すると400基以上になる。これらは富山県のほぼ中央に位置する射水丘陵[註1]やその東に位置する呉羽丘陵に特に多く分布する。そこは古代の製鉄炉やこれに関わる炭焼窯，須恵器窯の分布と重なり古代の手工業生産地帯となっている。

焼壁土坑からは遺物の出土はほとんどなく，周辺の遺物の状況や，出土した炭化材の放射性炭素年代測定，焼土の考古地磁気年代測定から古代の遺構と報告されているのが全体の3割ほどで，時期不明の遺構が大半である。徳万頼成遺跡で検出された焼壁土坑はわずかな出土遺物と放射性炭素年代測定から古代の遺構と判明しているが，これまでに古代と報告されている焼壁土坑と同様な機能を持つと考えられ，「伏焼法による簡易の炭窯」（堀沢2002など）と推測される。

炭と言えば，製鉄のほか鍛冶用の炭，暖房や炊事の日常生活に用いる炭が想定される。しかし，奈良時代では，岸本1998によると，木炭を使用したのは少数の皇族，貴族，豪族で，一般大衆は，土間に直接炉やかまどをつくり，薪，かやなどを燃料とし，炭のような当時の高級燃料は使わなかった，とある。中世になると，北陸では14世紀末頃，土製の火鉢や石製の行火など炭を燃料とする暖房具が使用される（垣内1990）。富山県内でも数例の出土があるが，庶民まで普及していたのかは不明である。近世以降では，南砺市の医王山麓や周辺で炭を焼いていたことが記されている（桃野・前田1993）。この炭は鍛冶炭や鉱山の精錬にも利用されていた。近代以降では，『富山県史民俗編』「いろりとその周辺」で燃料に関する記述[註2]があるが，炭の記載はない。以上のことから，古代では庶民は日常生活に炭を使用したとは考えにくく，徳万頼成遺跡で古代に製炭を行っていた場合，製鉄や鍛冶用の製炭と想定される。

製鉄や鍛冶用の炭については，江戸時代中期に確立された「たたら製鉄法」の技術体系について詳しい窪田1987によると，「たたら用の木炭は，たたら用大炭と鍛冶用の小炭とにわけられている。そして原則として大炭は鉄山の炭焼き頭が支配する山子が焼き，小炭はおもに地元の農民をやとったり農家の副業として焼かせたりした。」とある。また，「たたら用大炭は，（中略）その炭の善し悪しとともに直接たたらの製品の質，量，に響いてくるので，すべて，たたら場の直営で生産した。（中略）一方鍛冶用の小炭は，たたら場でできた製品屑をまとめて処理し，庖丁鉄を作るための熱源に使うもので，その原木は大炭原木の不用品すなわち枝葉を野焼程度に焼いたのが実状」とある。幕末期の長州藩の製鉄に関する技術・民俗を伝える絵巻「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」（財団法人 JFE21世紀財団2004）では，大炭は大型の窯を築き，小炭は平地で野焼きしている様子が描かれている。また，江戸時代の製鉄業を記録した『鉄山必用記事』では小炭を焼く際に「（中略）鍬にて一間四方も打開き，平に真中には少し低きやうにして，（中略）」とあり，地面を平らまたは真中を少し掘りくぼめて製炭を行っていたようである。時代は異なるが，これらを参考にすると，徳万頼成遺跡の焼壁土坑で生産された炭も小炭と推定され，近隣の鍛冶の工房に供給されたと考える。

近隣では遺跡の東側に位置する庄東山地や射水丘陵に増山製鉄遺跡群があり，また宮新遺跡で鉄滓が，高沢島Ⅱ遺跡で鉄滓やふいごの羽口が出土し，小鍛冶の工房跡と思われる遺構を検出している（西

井・安念1990)。平野部では，徳万頼成遺跡の約2.5km西方に位置する久泉遺跡で古代の包含層から鉄滓が出土している（野原2007)。同様に，約5km北方に位置する高岡市滝遺跡でふいごの羽口・鉄滓を伴う焼土や粘土帯からなる遺構が3基みつかっており，上面検出のみであるが鉄の精錬・鍛冶作業に伴う炉址と推定されている。遺物の時期は奈良時代後半から平安時代初頭である（荒井2002)。このように周辺には丘陵部のほかに平野部でも製鉄，鍛冶関連の遺跡があり，徳万頼成遺跡でもその一端を担っていた可能性がある。

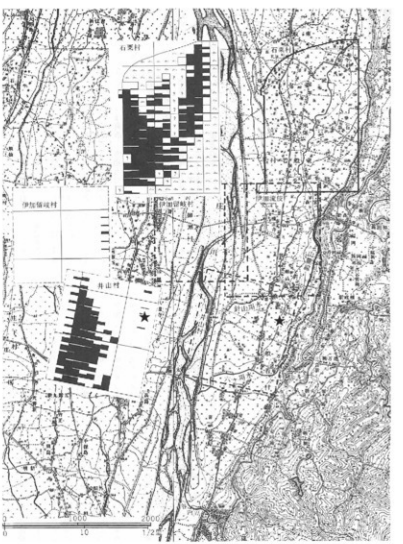
（2）水田について

富山県では古代の東大寺領荘園は砺波郡4箇所，射水郡4箇所，新川郡2箇所である。砺波郡4箇所のうち，井山村の推定地は金田章裕氏の研究（金田1998）によると徳万頼成遺跡の範囲と重なる。また，古代の東大寺領荘園に関わる図面は26点現存し，うち17点が越中国の各荘園を描いたものであるが，井山村の地図も1点現存する。徳万頼成遺跡の調査は3回目となるが，水田遺構を検出したのは初めてとなる。水田遺構は植物珪酸体分析も行い，イネを栽培していたことが分かっている。この水田が井山村の水田となるのか，古代の地図や放射性炭素年代測定の成果を用いて検証していきたい。

A　神護慶雲元年越中国砺波郡井山村墾田地図[註3]との比較（第75図）

この地図によると，井山村は砺波郡の25～27条に位置する。120町の占有地があり，砺波郡内では最も大きな面積である。そのうち50％以下の47町が開田されている。地図では西半分に開田が集中し，東半分はわずかである。

金田1998　142頁「石栗村・伊加留岐村・井山村図の現地比定」図に徳万頼成遺跡の水田を検出した位置を掲載した。（第75図，★で表示した箇所)。井山村の東半分に該当し，水田がわずかに見られる箇所に位置する。ここを詳細にみていくと，東側ではあるが，調査地は水田が開かれた場所にちょうど位置する。地図によると，1町のうち開田は3段240歩あり，面積にすると1町11,881㎡のうち4,360㎡が開田されている。今回の発掘調査では東西約164m，南北約10



第75図　石栗村・伊加留岐村・井山村図の現地比定と田の分布状況
金田1998より転載，★を加筆　　★平成26年度調査地点

第76図　平成19・20年度・平成26年度調査位置図（古代）（1：2,500）

この地図は、富山県総合計画基礎図1：2,500（昭和36年測量）に一部加筆したものである。

mの範囲で水田が検出され，水田の面積は約1,640㎡となる。推定地ということが前提であるが，この箇所の開田された水田の内38%ほどが調査されたことになる。

また，金田1998では，井山村の現地比定で地形条件から「全体が25度程度東へ傾いた方向で条里プランが認識されていた可能性がある。」とされている。徳万頼成遺跡でも同様に東に傾いた畦畔が検出されている。地形の制約を受けていないH・I畦畔とその間に位置するSD53が25度東に傾いて位置している。検出された畦畔の中で規模の最も大きなもので，2条の畦畔と1条の溝を合わせると幅約5mを測り，坪境のような機能を考えている。また，平成19・20年度発掘調査（野原2009）で検出された杭列Aは杭の放射性炭素年代測定で8世紀後半～10世紀後半と判明しているが，この杭列は12度東に傾いている。また，杭列Aと，本報告に掲載したH畦畔との間は約327mであり，ほぼ3町分離れている（第76図）。古代に東に傾いた畦畔が複数存在し，それらは坪境の可能性がある。

B　年代の検証（第41表）

徳万頼成遺跡では，水田の下層では古代の焼壁土坑を検出し，水田の上層では洪水堆積物の上面で中世の掘立柱建物を検出した。この間が水田の時期となり，耕作土中から8世紀後半～9世紀前半の土器が出土している。水田の下層から検出された焼壁土坑からわずかに土器が出土しているが，耕作土中から出土した土器と比較しても，大きな時期差は見られない。焼壁土坑では，検出した6基のうちの2基と，焼土地点1で出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った。測定結果は井山村に関する史料の記述や遺物の年代と合わせて第41表に掲載した。年代測定では，7世紀前半～8世紀後半までの時期という結果がでている。測定を行った炭化材は，樹皮直下の最終形成年輪が確認できていないため，古木効果の影響により古い年代が得られている可能性があるが，遺物の時期と合わせて考えると焼壁土坑の時期は8世紀後半としておく。

史料では8世紀中頃から9世紀中頃まで井山村のことが記述されており，この期間に水田が存在したことが想定される。先に述べた通り，神護慶雲元年の地図に開田が記されている箇所に相当すると考えられ，そうすると焼壁土坑が埋没して間もなく水田が開かれたと考えられる。出土遺物，史料の両者から，水田は8世紀後半から9世紀中頃の時期に存在したと考える。また，水田は東側の山地からの洪水により厚い砂層に覆われ，終わりを迎えるが，洪水の時期は9世紀中頃と考える。

東大寺領荘園井山村の推定地である徳万頼成遺跡で，井山村の当該時期に確実に水田が存在し，荘園の一部の可能性が高いことが明らかとなった。荘園と決定するには重要な文字資料がなく，可能性にとどめておきたい。荘園の発掘調査は荘園の管理施設や，水田を耕作する人々が居住する集落が見つかることが多いが，今回の調査では水田が見つからった。図面が現存する東大寺領荘園の推定地で水田が見つかったのは徳万頼成遺跡が初例となる。

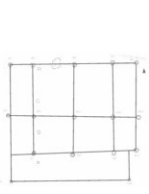
第41表　井山村関連史料と年代

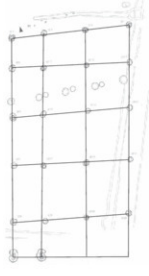
年号	事柄	史料名	放射性炭素年代測定結果（焼壁土坑）			遺物の年代	
			SX106	SX111	焼土地点1	焼壁土坑	水田層
			~727	~685	~735		
			~728	~685	~736		
			727		741		
天平18年7月（西暦746年）	大坪家督、越中国守就任						
天平勝宝元年8月（西暦749年）	東大寺占墾地使等平安京嵯峨中に派遣され、東大寺荘園を占定						
天平勝宝3年7月（西暦751年）	大坪家督、帰京						
天平宝字3年11月（西暦759年）	伊加流伎野地一荘町の開に、利波臣志留志地と記述あり	東大寺開田地図				8世紀後半	8世紀後半
天平宝字3年11月（西暦759年） 天平勝宝3年3月（西暦762年）	利波臣志留志が東大寺に墾田一荘町を献上した	東大寺開田地図・開田本紙				～	～
天平神護3年5月（西暦767年）	井山荘12町（足関百町東85歩（每分1町、分間南町85歩）、北開百12町（足関百町西5歩、北開百12町2段25歩）	越中国司牒					
神護景雲元年11月（西暦767年）	伊加留紀村地区の南に、同方墨田地井山村と記述あり 井山村12町（足関百町西5歩、北開百12町2段25歩）	東大寺墾田地図			~765		
			~769			9世紀前半	9世紀前半
承和6年2月（西暦841年）	井山荘の記述あり	墓院処所分状等					
元慶4年11月（西暦880年）	井山荘の記述なし	東大寺封戸荘園并寺用帳					
延喜4年7月（西暦904年）	井山荘が荒廃（広荒）	東大寺要録荘田注文案					
天治2年（西暦1186年）	燈大寺家相老野荘が成立、すでに四大臣燈大寺実定の家領となる	吾妻鏡					

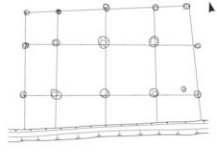
3　中　世

平成26年度の調査で1棟の中世の掘立柱建物が見つかり，平成19年度の発掘調査でも建物跡が4棟見つかっている。そのうち規模がわかる建物が2棟あり，合わせて3棟を図示した（第77図）。いずれも総柱建物で，富山県内のこれまでの調査例を参考に中世前期と推定している。これらの規模は，平面積は第77図の左から43.75㎡，72.45㎡，43.24㎡となる。柱穴の平面形は30cm前後が中心，柱間は左から4間×3間，5間×3間，4間×2間である。平成26年度調査で見つかった建物は調査区境に隣接しており，平成19年度調査で見つかった建物が2棟とも梁行3間であることから4×3間となる可能性が高いと考える。

平成26年度調査の建物は埋没した縄文時代の自然流路が位置する東西の端を避け，周辺よりも若干標高の高い箇所に立地し，平成19年度調査の建物も周辺よりも比較的標高の高い箇所に立地する。平成19年度調査の建物と平成26年度調査の建物は最短で約300m離れて位置する（第78図）。砺波平野では一般に表土が極めて浅いが，耕作に適した表土の厚い部分が所々にパッチ状に存在しており，古代・中世の耕地と屋敷はこの状況に制限されてパッチ状にしか分布し得なかったことが判明しており（金田1986），標高の高い箇所を選んでなおかつ建物が離れて位置する様子はこの状況を示している可能性がある。平成26年度の調査では建物のほかは柵，土坑，溝がある。建物のない箇所は溝が検出され，水田などの耕作地としての用途が考えられる。近世以降は溝のみが検出されており，水田などの耕作地が広がる景観であったと推定される。（高柳由紀子）







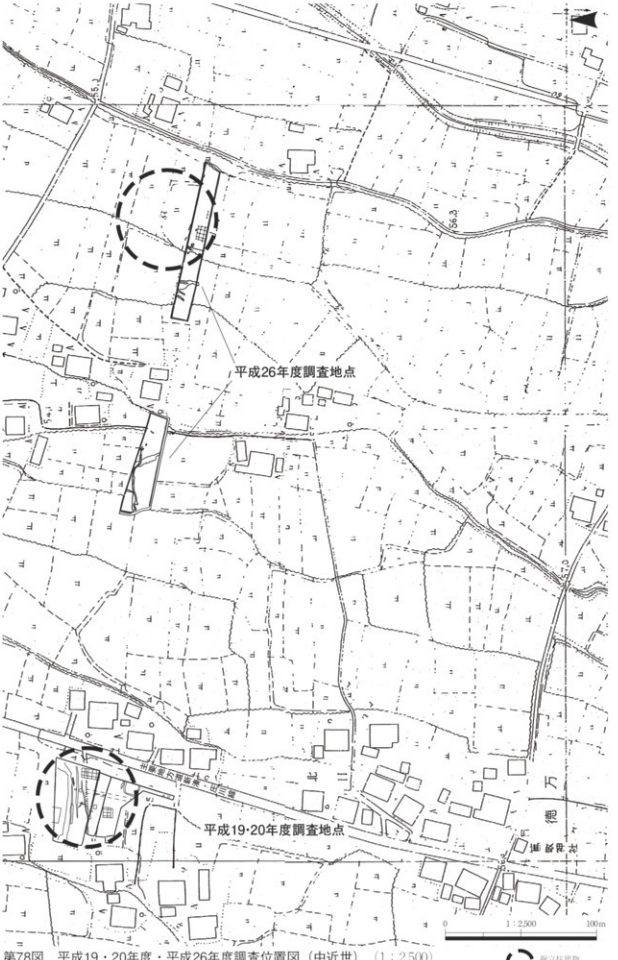
第77図　徳万頼成遺跡の中世掘立柱建物（1：200）

註

註1　周辺の遺跡については，第Ⅱ章位置と環境に詳細を掲載している。

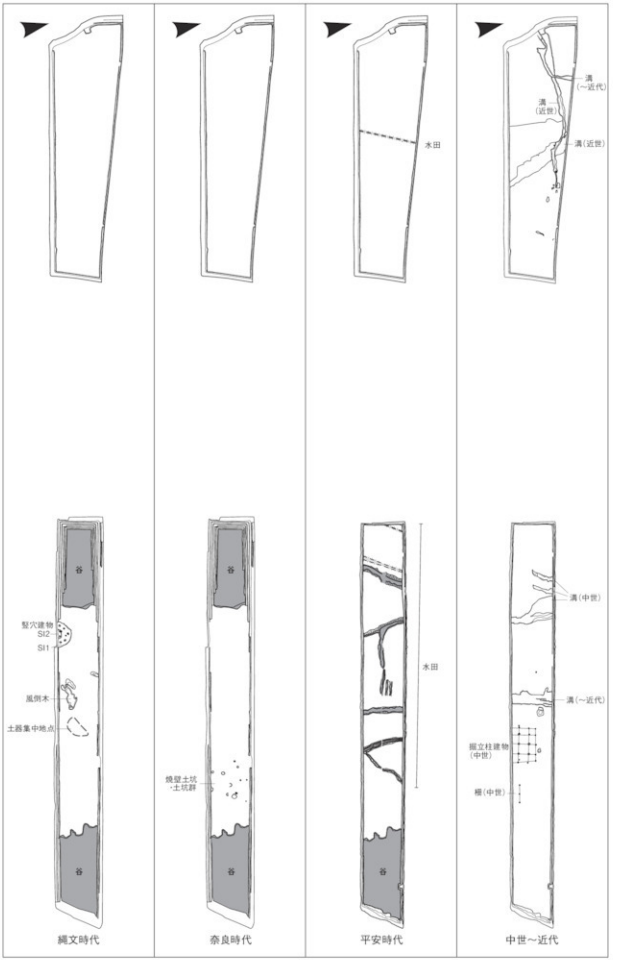
註2　昭和20年頃まで「燃料といえば山手は大きなホダや薪，ホエ，柴を燃やすが，平野部では屋敷林の枝や落葉くらいしかないので，多くはわらをたいた。わらの場合は灰が多くたまるので，一般に平野部のいろりは深く作られた。」

註3　砺波市1990付録の地図を用いた。



第78図　平成19・20年度・平成26年度調査位置図（中近世）（1：2,500）

この地図は、富山県総合計画基礎図1：2,500（昭和36年測量）に一部加筆したものである。



第79図　遺構変遷図（1：1,000）

引用・参考文献

荒井隆　2002「滝遺跡」『市内遺跡発掘調査概報ⅩⅡ』高岡市教育委員会
池野正男ほか　1991『上野南遺跡群発掘調査報告』小杉町教育委員会
大塚昌彦　2000「伏焼法による炭焼き土坑」『群馬考古学手帳　10』群馬土器観会
坂内光次郎　1990「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌　第33号』石川考古学研究会
岸本定吉　1998『炭』創森社
金田章裕　1986「砺波散村の展開とその要因」『砺波散村地域研究所　研究紀要　第3号』砺波市立砺波散村地域研究所
金田章裕　1998『古代荘園図と景観』東京大学出版会
窪田蔵郎　1987『たたら製鉄法』『改訂　鉄の考古学』雄山閣
肥田順一・折原洋一　2001『本調査遺跡のまとめ11赤坂Ｂ遺跡Ⅱ地区』『太閤山カントリークラブ造成地内遺跡群発掘調査報告』
近藤顕子ほか　2002『富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡　開ヶ丘中山Ⅳ遺跡　開ヶ丘中山Ⅴ遺跡　開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
財団法人 JFE21世紀財団　2004『たたら　日本古来の製鉄』
下原重仲　1784『鉄山必用記事』『日本庶民生活資料集成　第十巻』三一書房
下原重仲・館　充　2001『現代語訳　鉄山必用記事』丸善株式会社
神保孝造・久々忠義ほか　1978『梅檀野遺跡群予備調査概要』砺波市教育委員会
千葉孝之・福山俊彰・岡宮正光ほか　2004『富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
砺波市　1990『砺波市史　資料編１』
富山県　1973『間取りと住まい方　いろりとその周辺』『富山県史　民俗編』
西井龍儀・安念幹倫　1990『考古　5. 古代』『砺波市史　資料編１』考古・古代・中世　砺波市
野垣好史　2007『富山市開ヶ丘中遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
野原大輔ほか　2005『安川天皇窯跡発掘調査報告』砺波市教育委員会
野原大輔　2007『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』砺波市教育委員会
野原大輔ほか　2009『能万頼成遺跡発掘調査報告Ⅰ』砺波市教育委員会
橋澤道博ほか　2003『富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　開ヶ丘中山Ⅰ遺跡　開ヶ丘中山Ⅳ遺跡　開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
樋口清之　1993『木炭』法政大学出版局
藤田慎一ほか　2008『富山市北押川Ｂ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田慎一　2015『富山市二本榎遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
堀沢祐一　2002『富山市境野新南Ⅱ遺跡・池多東遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
桃野八郎・前田廣　1993『第四章医王の山と里の民俗　2. 山とくらし』『医王は語る』富山県福光町　医王山文化調査委員会
吉田寿　2008『富山市北押川Ｃ遺跡　御坊山遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

遺跡遠景
1．南から　2．東から

図版2

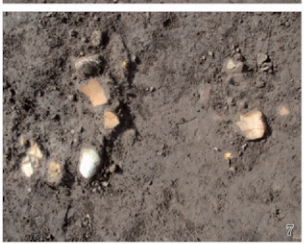
縄文時代　全景・竪穴建物

1. 全景（西から）　2. SI1（北東から）　3. SI1炭化材No.3出土状況（東から）　4. SI1炭化材No.4出土状況（東から）　5. SI1炭化材No.1出土状況（東から）

縄文時代　竪穴建物

1. SI1土器No.9出土状況（東から）　2. SI1土器No.26出土状況（東から）　3. SI2（東から）　4. SI1（北東から）

図版4



縄文時代　谷・土器集中地点

1. NR52（南東から）　2. NR52（北東から）　3. 土器集中地点1（北から）　4. 土器集中地点1No.1（北から）　5. 土器集中地点1No.2（北から）　6. 土器集中地点1No.3（北から）　7. 土器集中地点1No.5・6（北から）　8. 土器集中地点1No.7・8（北から）

古代下層　焼壁土坑・土坑・焼土地点

1. 焼壁土坑・土坑群（東から）　2. SK101検出状況（東から）　3. SK102炭化物・焼土検出状況（南から）
4. SK105炭化物・焼土検出状況（西から）　5. 焼土地点1検出状況（北から）

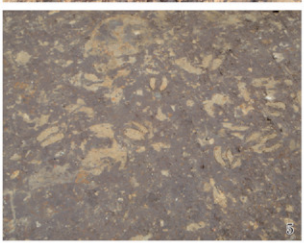
図版6

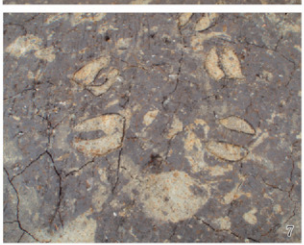
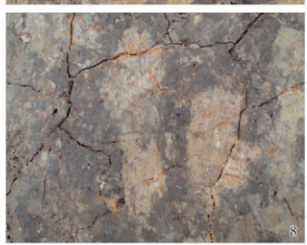
古代上層　水田
1. 水田（西から）　2・3. 水田（南から）

古代上層　水田

1．H畦畔（南から）　2．A畦畔（南から）　3．E畦畔（南から）　4．F畦畔（南から）　5．G畦畔（南から）
6．B畦畔（南から）　7．C畦畔（西から）　8．G畦畔（南から）

図版8



古代上層　水田

1．C畦畔遺物出土状況（北から）　2．H畦畔遺物出土状況（南東から）　3．L畦畔付近遺物出土状況（南から）　4．A地区Ⅲ層遺物出土状況（西から）　5・6．X43Y108付近足跡検出状況（西から）　7．X43Y112付近足跡検出状況（北から）　8．X45Y114付近足跡検出状況（東から）

中近世　全景

1．A地区全景（東から）　2．B地区全景（北から）

図版10

中近世　掘立柱建物・土坑・溝

1. SB1（南西から）　2. SP10（南から）　3. SP11（西から）　4. SP16（西から）　5. SP9（北から）
6. SK23（北東から）　7・8. SD4（南から）

縄文時代　縄文土器・土偶

図版12

縄文時代　石製品

SI1（230・231）　NR51（235）　NR52（227～229）　包含層

236

239

240

238

縄文時代　石製品

SI1（236・239）　包含層

古代　須恵器

SK102（241）　水田（246・252・253・255・256・259・263～266・269・271～273・276～279・282・303・304）　包含層

274

287

283

281

古代　須恵器・土師器
水田

図版16

古代　土師器・石製品

SK102（242）　SK107（243）　水田（244・284・285・290～292・294～296・298・301・302・305・306）

航空写真

1．1961年国土地理院撮影　2．2009年国土地理院撮影

図版18

1

21

60

67

36

縄文土器

69

70

86

92

102

107

137

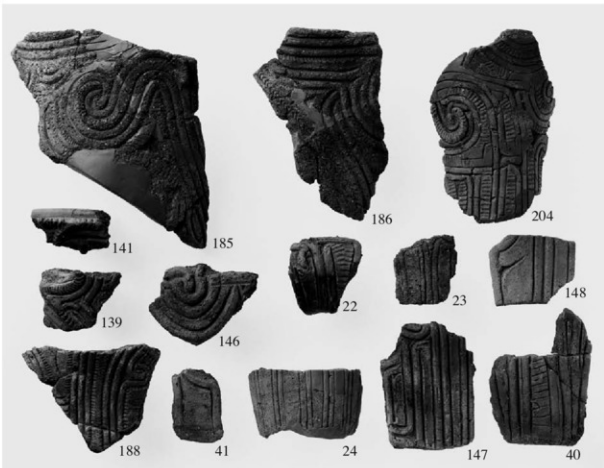
縄文土器

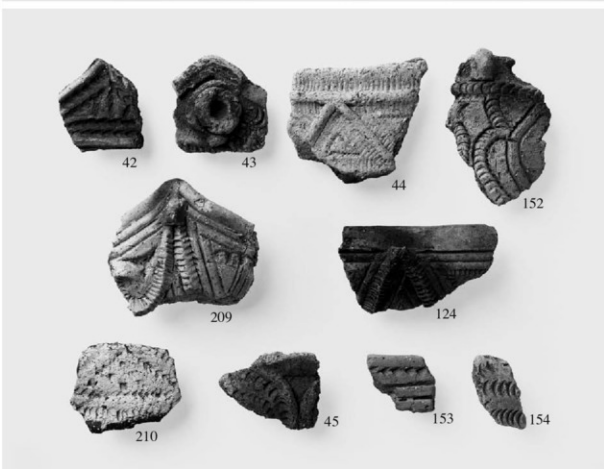
SI1（69・70・86・92・102・107）　NR52（137）

図版20

縄文土器

SI1（4～6・8～14・16・20・26・28～31）　SI2（38）　SK114（122・123）　NR52（128～131・133～136・138・140）　主器集中地点1（184）　包含層

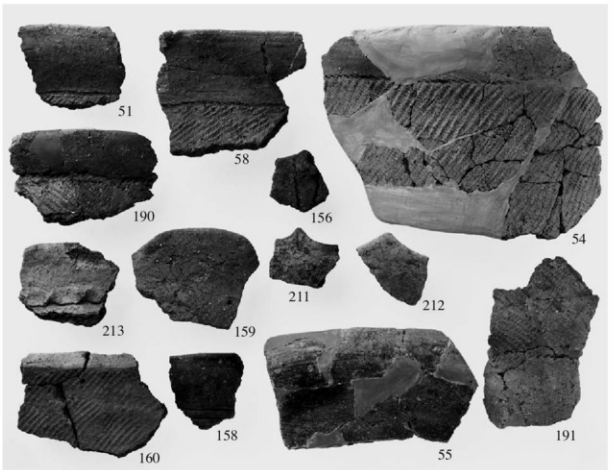


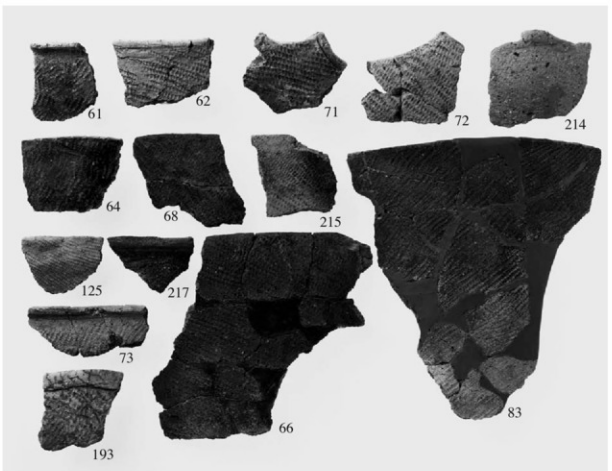


縄文土器

SI1（22～24・40～45）　SK114（124）　NR52（139・141・146～148・152～154）　土器集中地点1（185・186・188）　包含層

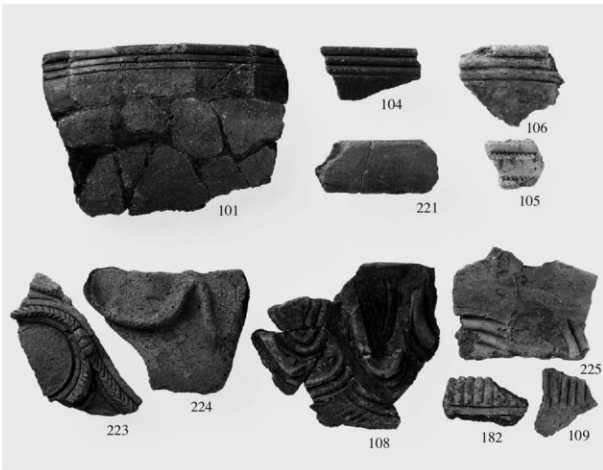
図版22

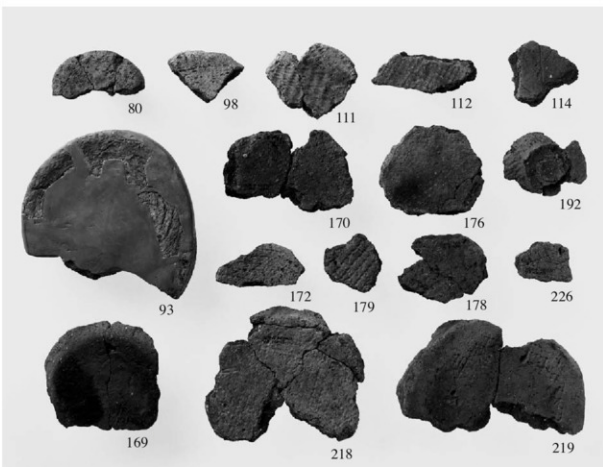




縄文土器

SI1（51・54・55・58・66・68・71～73・83）　SI2（61・62・64）　SK114（125）　NR52（156・158～160）
土器集中地点1（190・191・193）　包含層





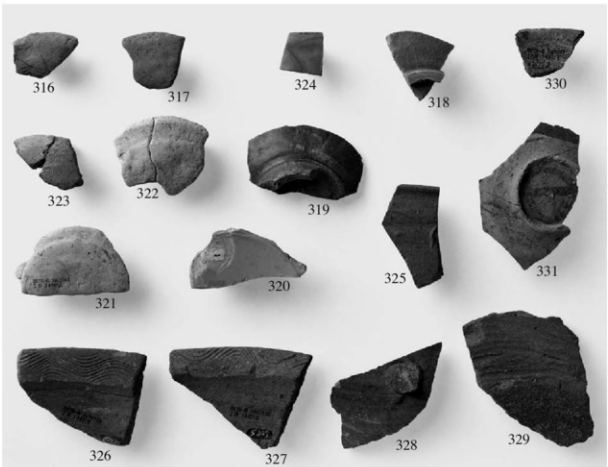
縄文土器

SI1（80・93・98・101・104・108・109・111・112・114）　SI2（105・106）　NR52（169・170・172・176・178・179・182）　土器集中地点1（192）　包含層

図版24

120

土偶
SI2



中近世　土器・陶磁器
SP13（317）　SK12（316）　SD4（318～320）　包含層

報告書抄録

ふりがな	とくまんらんじょういせきほっくつちょうさほうこく
書名	徳万頼成遺跡発掘調査報告
副書名	国道359号砺波東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘報告
巻次	Ⅰ
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第69集
編著者名	高柳由紀子，町田賢一
編集機関	公益財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒930-0887　富山県富山市五福4384番1号　TEL　076-442-4229
発行年月日	2016年3月11日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
とくまんよりなりいせき 徳万頼成遺跡	となみしよりなり 砺波市頼成	16208	208123	36° 38′ 10″	137° 0′ 59″	20140630～20141024	2,510	国道359号砺波東バイパス建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳万頼成遺跡	集落	縄文時代中期前葉 後半～中葉前半	竪穴建物　2棟 自然流路　2条 土器集中地点　1箇所	縄文土器・土偶・石製品	平野部で竪穴建物を検出した
	田畑・その他の生産遺跡	古代	畦畔　12条 溝　2条 焼壁土坑　6基 焼土地点　1箇所	須恵器・土師器・石製品	8世紀後半～9世紀前半の水田を検出した
	集落	中世	掘立柱建物　1棟 柵　1列 柱穴　18基 溝　4条 土坑　2基	中世土師器・珠洲・中国製青磁・中国製白磁・木製品・石製品	中世前半期の掘立柱建物を検出した

要約
縄文時代の砺波平野ではこれまで低地での竪穴建物の検出例はなく，丘陵部が中心であった。竪穴建物を検出した今回の調査で，少なくとも縄文時代中期から平野部にも居住域を設けていたことが明らかとなった。また，竪穴建物廃絶後の土器廃棄場から出土した土偶は他に類例が少なく，貴重な資料となった。古代では奈良時代から平安時代に所在した東大寺領荘園井山村の推定地となっており，今回の調査で見つかった水田はこの一部と考えられる。水田が作られる前では焼壁土坑が見つかっており，簡易な炭焼きを行っていたと考えられる。中世では東大寺領荘園の衰退を受けて成立した徳大寺家領松若野荘の推定地となっている。平成19年度に砺波市教育委員会が行った発掘調査と同様に掘立柱建物が見つかっており，同様な構造を持った建物が点在して，現在にもみられるような散村的な景観であったことが想定される。

2016（平成28）年3月1日　印刷
2016（平成28）年3月11日　発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第69集

徳万頼成遺跡　発掘調査報告

―国道359号砺波東バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ―

編集・発行　公益財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL　076－442－4229

印　刷　中村印刷工業株式会社
〒930-0039 富山市東町2丁目3－22
TEL　076－424－4616